

母を恋うる物語

——葛の葉伝説をめぐって——

一 狐の子

佐々木 徹

「吼^{こんか}喊」という言葉がある。コンコンという狐の鳴き声のことである。小さいころ聞いた『叱^こられて』という童謡の一節、

「叱^こられて 叱^こられて

あの子は 町までお使いに

この子は 坊やをねんねしな

ゆうべさみしい 村はずれ

コンときつねが 鳴きやせぬか」

のように、狐はコンと鳴いたようだ。今では、村はずれで狐の鳴く声を聞くこともない。第一、村そのものが少なくなり、その多くが町となり市になった。

この童謡を聞いたある人が、

「なぜ、こんなに子供たちが叱られるのですか」

とたずねた。

「そう言われると、一番も二番も「叱られて 叱られて」で始まる。

昔は子供が多く、貧しい家では口減らしのために、子守りや下働きに出された。まだ小さいので十分な仕事もできず、親のいる里が恋しく、たえず大人から小言をもらっていたのではないだろうか。

『赤とんぼ』にうたわれている「ねえや」も子守りをしているが、「十五でねえやは嫁にゆき お里の便りも絶えはてた」とあるから、最初、奉公に来たときはずいぶん幼かったのであろう。

狐や狸は、人を化かすという言い伝えがあった。ともに人間に近く、しかし犬や猫のように家に住みついていくわけではないので、どこか油断のならない感じがする。その狐が人間と夫婦になり、子供をもうけたという話が泉州信田の森（大阪府泉北郡）に伝わっている。一般には『葛の葉』として知られている、安倍保名と白狐の物語である。それをもとに、北條秀司が舞踊劇の台本を書いた。公演は、一九五八年（昭和33）十一月、新橋演舞場での「東おどり」であった。

舞台は津の国、安倍野の里の晩秋、保名と葛の葉が隠れ住む家の中。

葛の葉が一人息子の童子に歌を教え、ほうびの菓子を与えている。

「母さま、父さまは遅いのう」

「獲物を追うて、きつと遠くまで足をのばされたのであろう。……いまにお戻りになるほどに、お菓子を食べたら、昼寝をしたがよいわいな」

夫婦の契りをおかして、もう四年、自分の素性を思い、わが子の将来を思うとき、いつそ信田の森に帰って陰ながら祈ろうかとも考えるが、夫の保名と童子から離れることはとてもできない、と思ひ直す。

「冷たい風が出たそう。坊に風邪をひかせては……。おう、いつのまにかもう昼寝。母の悲しみも知らずと、あけないこの寝顔わいの。ほほ」

と笑いながら涙を拭き、童子を抱き上げて奥へ入る。

そこへ都から桔梗の前と腰元の萱野がやってくる。じつはこの二人、正体は貉で、同じく貉の尾花姫の使いだった。

「そなたが保名どのの妻女、いいや、保名どのをとりこにした、葛の葉とやらいう里女じゃな」

「はい、葛の葉めにございます」

「御門さまのお使者、桔梗の前さまじゃ」

恐縮する葛の葉に向かって萱野は、

「さて葛の葉、四とせ前、かしこくも御門さまの御代参として、信田明神に参向したる保名どの。そのままふつりと消息を絶たれ、御門さまはもとより、ご婚約の尾花姫さまのお歎きは殊の外、やつとその在所が見つかり、天にも昇るおよろこび、一日も早くお顔が見たいとお姫さまおみずから、はるばるとお迎えにおいでぞばした」

おどろく葛の葉に、

「久しきにわたり、保名どのを一人占めた罪はゆるしてやるほどに、早や早やこの家を立ち去れい」

「これ萱野、そなたのように、そうきつう言うても」

と桔梗の前はとりなして、

「葛の葉とやら、長い間、保名どのへの心づくし、礼を言います。賊に出会い、命を果てようとなされた保名どのを、深切に介抱し、もとの身体にしてくれたばかりか、子までなしたる夫婦仲……」

桔梗の前の言葉を萱野が受けて、

「その子が今年四つになることも、ちゃんと都に届いている。今日はその子を迎えにきました」

思いがけない話の展開に、葛の葉は動揺する。

「知つてのとおり保名どののは、陰陽道の大博士たるべき家筋の人、それがこのような草深き里に埋もれ、あたら名家を絶やすかと、嘆かぬ者は一人もない。在所がわかつた上からは、一日も早う都に呼び戻せ、子があるならばその子も連れ、ゆくゆくは父が名跡を継がせようと、ありがたい御門さまのお言葉じゃ」

二人が帰つたあと、葛の葉はわが子の将来を思い、夫の保名を思い、なかなか決断がつかない。たまりかねて泣き伏しているところへ、目の覚めた童子が奥から出てくる。

「母さま。……父さまはまだかや」

かわいい声に、葛の母はひしと抱きしめて、決して離れまいと心に誓うのである。

一方、用人、腰元、若党などを従えた尾花姫の一行、じつは貉たちの行列が、野の道をにぎやかにやってくる。

「野越え 丘越え 里うちすぎて

来るは誰ゆえ そさまゆえ

道はそぼ道 あぶないさ

谷峰しどろに 越えて行け

あの山越えて この山越えて

来るは誰ゆえ そさまゆえ

誰ゆえ誰ゆえ そさまゆえ」

ここでは、大阪の古い地唄が転用されている。

「そさま」とは「あなた」のこと、「そなたさま」が短くなったかたち。「しどろ」というのは、秩序なく乱れた様子をあらわす言葉で、今日では、話し方が支離滅裂になったことを形容する「しどろもどろ」という言い方のなかに残っている。

もとの地唄は、「はるばる山や谷をを越えて、けわしい道をやってきたのは、あなたに会いたい一念から」という恋の歌である。

獺から帰った保名に、葛の葉は思い切って別れ話を持ち出すが、

「いやじゃ、どう考えてもそんなことは出来ぬ。尾花の父御には、口には出せぬ大恩あれど、というて、そなたを捨てて、どうして都に戻れよう」

安倍野に住むと決めたとき、保名はもうこの世のことは捨てたつもりだった。揺れる心を、結局はわが子のためと、みずから身を引くことを覚悟した葛の葉は、

「まだそのような……。女のわたしでさえ、もうこのように、心を決めたのに。お願いです。明日にも都へ」
「その代わり、そなたも一緒に」

「それが出来るくらいなら」

眠っているわが子をつくづく眺めた葛の葉は、身を引き裂かれる思いで、

「よく眠っているのをさいわい、わたしは身を隠します。坊が眼をさましたら、どうぞ、母は死んだと言うて下され」

「おろかなことを言うのではない。腹を痛めた母の身で、よくそんな気になれるものじゃ」

しかし、葛の葉にしてみれば、人ならぬ身で腹を痛めたのが、そもそのあやまち、今の別れの悲しさは、その報いだとあきらめるしかない。その罪は、もちろん保名にもあつて、だからこそ、保名は共に連れだつて都へ行くことをすすめたのである。

「お姫さまは、坊を自分の子と思うていつくしんで下さいますそうな。安心して、わたしは信田に帰ります」
と葛の葉は、布地の束を保名の前に置いて手をつき、

「これは坊が当座の着替え、ゆうべ夜なべで縫い上げました。では、旦那さま、長々お世話になりました」

尾花姫が村はずれまでやって来たという先触れがあつた。もうぐずぐずはしていられない。葛の葉は保名のとめるのも聞かず、未練を断ち切り、住み慣れたわが家から立ち去つて行く。

尾花姫を迎えた保名の住まいでは、祝いの酒盛りが始まった。

童子は、保名の膝にもたれて眠っている。

はじめ萱野と若党の与勘平が戯れ歌に合わせて踊り、つぎに尾花姫にも所望する。と姫は恥じらいながらも、しとやかに、

「安倍野路や

行けば野末に 夕づく夜

人顔さえも ちらちらと

暮れぬ先より ともす灯は

早や狐火か いや白菊の

花に露ちる 夕月夜」

と舞い始めるが、やがて貉の本性があらわれて乱れだし、そこへ桔梗と萱野もからんで、いやしい振りの下品な踊りになってしまう。

保名は童子を抱いてその場を退散、しかし感づいた萱野は、

「そのようなお荷物は、こちらへ置いて」

と童子を取り上げる。わっと泣き出す童子を、今度は尾花姫が抱き上げようとすが、童子は、

「父さま、母さまはどこへ行かれた」

と、しきりに母の名を呼んで恋い慕う。

二 母ふたり

いつしか秋はたけて、冬の到来を告げる銀の月がかかるころとなった。保名の家に住みついた尾花姫はすっかり女房姿になっている。

酒を買いに行かされた童子が、暗い夜道を帰ってくるが、家の前でつまづいて倒れ、持っていた徳利を割ってしまった。

音を聞きつけ、家から出て来た尾花は、

「やあ、徳利を割って、酒をこんなに、このあほうッ」

と怒鳴りつける。

「いつまで泣いているのじゃ。もう一べん行って来や」

「坊は足が痛うて……」

「足くらい何じゃ。狐の子でいながら。早くとんで行ってこい。今度そそうをしたら、家には入れぬぞ」

じゃけんに追い払われた童子は、人っ子ひとりいなしの野の道を、またとぼとぼと歩いて行く。すると、草の陰から童子を呼ぶ声がする。童子はすぐに気がついて、

「あつ、母さま」

「しっ、大きな声を」

と葛の葉はたしなめ、童子を力いっぱい抱きしめて、

「坊、会いたかった。……わるいとは知りつつ、どうしても顔が見たく、一里が二里、二里が三里、とうとうここまで来てしまった」

「母さま、坊と一緒にいて下され」

「その思いは山々なれど、坊の行く末のために。……いいえ、いま言うてもわからぬこと、あのお方を本当の母さまと思うて、何をされても辛抱するのじゃ。よいかや」

「いやいや。坊はもう家には帰らぬ」

「そのような聞き分けのないことを、言うてはなりません。今にきつと、よい母さまになって下さる」

そう言つて葛の葉は、お使いに行く童子の手をとつて一緒に歩きます。なかなかかはかどらない歩みに、葛の葉は童子を背中に負い、せがまれるままに子守唄をうたい始めた。

「姉さま姉さま どこへゆく

わたしは信田へ 里帰り

去ぬ道 知っているのかえ

知つてはいれど 心ぼそ

界の町まで 送りましょ」

保名は尾花との暮らしに嫌気がさしていた。

今日も帰つてみると、酔つ払つた尾花が徳利を枕に寝ている。思わず力まかせに揺り起こすと、尾花は酔いにうるんだ眼をあけて、

「おや、いつのまに。……お帰りあそばせ」

「坊はどこじゃ」

「ちよつと村まで、お使いに」

「この寒さに何用あつてじゃ」

「行きたいと言うから行かせました。……まあ、案山子のように立っていないで。坊が帰つて来ぬうち、ちよつと水入らず」

酒臭い尾花の息が保名にかかる。保名は顔をそむけて、

「近寄るな、このふしだら者が」

「ふしだらとは誰のことでしょう。狐を抱いて、子を産ませ、それで人をふしだら呼わり。男は勝手なものでござんす。ほほ」

保名は何も言わず、出て行こうとする。

「どこへおいでなされます」

「坊を迎えに」

「では、わたしも一緒に行きまする」

「要らぬ。そなたは先に寝るがよい」

冷たく突き放す保名に尾花は、偽りの涙を見せて、

「尾花は死にとうございます」

「死にたければ死ぬがよい。親御の恩は親御の恩。娘のそなたにかかりないこと。もうそなたには愛想が尽きた。さらば」

「どこへおいでじゃ」

「坊をつれて、信田の森へ」

信田と聞いて気色ばんだ尾花は、保名の袖をつかんで離さない。「離せ、離さぬ、離せ、離さぬ」と繰り返すうちに、童子が帰ってくる。

「坊、母さまのところへ行こう」

と保名が誘うと、童子は、

「母さまはそこに来ている」

と保名の手をとり、葛の葉のいるところへ親子ふたりは駆けて行く。

あとに残された尾花は、いよいよ貉の本性をあらわし、徳利の酒を飲みながら悔しがることしきり。

舞台の大詰めは信田の森のなか、花すすきが風になびき、美しい落葉があたり一面に降り敷いている。

葛の葉と尾花姫が同じ衣装、同じ振りで舞っている。

保名には、いずれが葛の葉、尾花姫かと区別がつかない。問いかけても、二人は声をそろえて、

「わたしがそうでござんすわいな」

と答えるばかり。

「まこと童子の母ならば、いつもの子守唄をうとうてみよ」

するとまた、二人一緒に同じ歌をうたい、踊りつづける。

困り果てたところへ童子が出てきて、葛の葉にすがりつき、

「母さま」

のひと言で決着がついた。

そのときすかさず、一人の僧侶が立ちあらわれる。

「木津に年古る女貉、保名の色香に惚れぬいて、葛の葉を追い出さん企み、見届けたり。この法印の呪法を受けよ」

「法印」とは「法印大和尚位」の略だが、ここでは転じて、旅の僧侶の意味で用いられている。化けの皮をはがされた尾花姫は、貉の姿に変わった。

保名は僧侶の前にひざまずき、

「尊き法の力にて、猪めらの悪企み、はじめて分明つかまつりました」

「われ都より下りしは、和泉の国の葛の葉狐、人間も及ばぬ恩愛の数々あり、畜生界より人間世界に拾い上げるべう使命を帯びて来たりしなり。今日よりは葛の葉は人間の妻」

その言葉を聞いて、保名と葛の葉は喜びの顔を見合わせる。

仏教には、輪廻転生という思想がある。悟らないかぎり、衆生は天人・人間・修羅・畜生・餓鬼・地獄の六つの世界をめぐるといわれる。今時、空には天国、地下には地獄があると信じる人はまずいであろう。

しかし、六つの世界は、人間の心の中にあるのではないか。動物のように本能だけで生きることあれば、闘いを生きがいとする人生もある。どこまで行っても満たされない欲望に駆り立てられているかと思えば、もう自分は救われないと絶望の淵に沈むこともある。それでも時には、利害打算を忘れ自分以外の人のことを思うやさしさも持ち合わせている。

畜生界より人間世界へ生まれ変わった葛の葉は、そんなやさしさを認められたと言えるだろう。

最後は旅の僧の、

「保名、葛の葉をつれ、即刻、都に帰るべし。陰陽界はその復帰を待っているぞ」

というせりふで、めでたしめでたし、「東踊り」の舞台は幕となる。

北條秀司の『保名と葛の葉』は、舞踊劇らしく美しい場面展開のうちに、さらりと描いている。保名をめぐる二人の女性が狐と猪、いずれも人間ではないために、メルヘンのような雰囲気も感じられる。

三 恋しくば尋ね来てみよ

信田の狐妻の話は古くから、さまざまに伝えられてきた。文章になったいちばん古いものが浄瑠璃『しのだづま』である。

狐狩りにあつて捕らえられそうになった女狐が保名に助けられる。恩を感じた狐は人間に姿を変えて、保名の妻となり、一子をもうけるが、秋のある日、美しい菊の花に見とれ、狐の正体をあらわしたところを童子に見られてしまう。そこで仕方なく、「恋しくば尋ね来てみよ和泉なる信田の森のうらみ葛の葉」という歌を残して去って行く。保名と葛の葉とのあいだにできた童子が、のちの陰陽師・安倍晴明になったとされる。

数多い『葛の葉』伝説の集大成ともいふべきものが人形浄瑠璃『芦屋道満大内鑑』である。これは歌舞伎としても繰り返し上演された。安倍保名と芦屋道満、二人の師匠にあたる陰陽道の大家・加茂保憲の死から始まり、秘伝の書をめぐる跡目争い、保憲の娘・榊と保名の恋、榊の継母とその兄・岩倉治部の策略、榊の自害、保名の狂乱と、波瀾万丈、極彩色のストーリー展開であるが、一番の見所はやはり、葛の葉と童子、母子の別れの場面であろう。

榊に死なれた保名は、失意のあまり正気を失い、かたみの小袖を持つてあちこちとさまよううちに、榊そっくりの女性と出会う。その人はじつは榊の妹で、事情を知った両親は、養女にやった榊の死を悲しみながらも、いずれは妹・葛の葉を保名のもとにと約束をする。数年が過ぎ、葛の葉をともなった両親が、安倍野の里に保名の住まいを訪ねてみると、おどろいたことに、そこにはすでに保名が女房の葛の葉と一緒に暮らしていたのである。

北條秀司の舞踊劇では、保名の住まいを訪れるのは尾花姫つまり貉だったが、歌舞伎では、本物の葛の葉ということになっている。両親とともに訪れた葛の葉を見て不審に思った保名が、奥で機を織るのは誰かとのぞいてみると、そこにもまた葛の葉がいた。一計を案じた保名は、葛の葉と両親には身をひそめてもらい、奥にいる葛の葉を呼び出す。

出て来た葛の葉は、今日はいつもとより帰りが遅かったが、寒くはなかったかと保名にたずねる。

「いやいや、今日は思いのほか、いこう世間も暖かで、さむもなかったよって、住吉へ参詣して、いつものとおり天王寺へまわって戻ったわいの」

「天王寺へばかりまわって戻りゃんしたには、いつもとなら余程おそう戻りゃんしたが、どこぞまだほかへ寄ってござんしたか」

「そればいの、おそかったはずのことがある。思いも寄らず六時堂の前で、そなたの親の庄司殿ご夫婦に、はたと行き会ったと思や」

「ええ、わしが父さんや母さんに会いしゃんしたか」

「そればいの。日ごろの不届きが胸につまって、おれや挨拶をしかねていたらば、あつちには一向うらみさっしゃる気色もなう、そなたの在所を聞いたによって、娘に会うために尋ねて来ましたけれども、見さっしゃるとおり連れ衆もある。この衆を旅宿へ送りとどけてから、日暮れにはそれへ参ろうほどに、必ず食べ物を用意は無用、洗足のことはいつつけておいて下されいと、なかなか心解けたる挨拶。一つ二つもの言うと思うたけれど、かいつまんで五年の話、思わず時をうつした。そなたも久しぶりで会うことじゃに、さぞ嬉しかる。おれも思うたよりご機嫌がようて、このような嬉しいことはないわいの」

「それはまあ、思いのほかの父さんや母さんの機嫌がようて、わしやなお嬉しうござんす。もう日暮れという

ても間もござんせねば、なんぼう何も用意は無用じゃとおしゃんしたとあつても、たまたまのことじゃによつて、何ぞせずばなるまいかいな」

奥に入った葛の葉は、衣服を着替え、童子を抱き上げ泣きながら、これまでのことを振り返り、童子に言い聞かせる。

浅ましくも恥ずかしいことながら、とうとう自分の本性あらわして、親子の縁もこれきりに、別れなければならなくなった。保名さまには事実をお話したいと思うけれど、おたがいに顔をあわせては話すこともむずかしい。六年前、信田の森で狩り出されたところを保名さまに助けられた、わたしはそのときの白狐。恩を返そうと、身を葛の葉に変えて、傷を負った保名さまを介抱、いつしか夫婦の仲となった。お前という子供までもうけて、ともに寝たのも昨夜が最後、名前を借り姿を借りた葛の葉どのには、何の恨みのない。これからは庄司殿ご夫婦をまことの祖父母、葛の葉どのを真実の母と思つて暮らしておくれ。手習い学問に精を出して、人様に笑われぬように。お前がつねづね虫けらの命を取るのには、母の狐の本性を受け継いだかと、心底かなしく思つていた。成人ののちは無益の殺生をしないように。たとえ別れても、母はお前の影身に添つて、これからもずっと見守つているからね。

「名残惜しや、いとおしや。離れ難なやこち寄れと、抱き上げ抱きつけ抱きしめて、思わずわつと泣く声に、保名ひと間を走り出て、しさいは聞きたり、何ゆえ童子を捨ててやるべきと、呼ばわる声に信田の庄司もまろび出て、放ちやらじと取りつけば、抱きし童子をはたと捨て、形は消えて失せにける」

すべてを聞いた庄司とその妻は、「こんなことと知つていたなら、わざわざ訪ねてこなくてもよかつたのに」と嘆き、葛の葉も、「親子の別れの悲しさは誰でも同じ、これからは自分が母になり可愛がつてあげるから、母と思つてなつておくれ」と童子を抱き上げるが、童子は乳をさがして、「いやいや、これは母さまではな

い」と逃げ出してしまふ。奥の部屋をあけ、障子に書かれた別れの歌「恋しくば尋ね来てみよ和泉なる信田の森のうらみ葛の葉」を見た保名は、

「われに名残は残らずとも、童子は不憫と思わぬかと、奥に駆け入り表に出て、狂気のごとく駆け巡れば、童子も父のあとにつき、母さまはどこへ行かしたつた、母さまのう、とかっぱと伏し、声をばかりに足ずり身をもだえて嘆くにぞ、庄司夫婦、葛の葉も、ともにあわれに取り乱し、前後不覚に嘆かるる」

浄瑠璃は、切々とそれぞれの情愛、哀しみをうたい上げる。

四 永遠に母なるもの

北條秀司は『保名と葛の葉』の収められた戯曲集のあとがきに、亡き母が添い寝に子守唄をうたってくれたことを書いている。その唄のなかの一つに、上方唄の『吼噓』があつて、

「都を追われた狐が、あと見返り見返りして野末に去つてゆくという文句だから、亡母はそれを葛の葉と解していたのであろう、いたわしや母上は、花の姿に引きかえて、という唄い出しからすでに悲しく、野こえ山こえ里うちすぎでの件りにかかるとホロホロと涙がこぼれた記憶がある」

と綴っている。

また、谷崎潤一郎の『吉野葛』にも、幼くして母を亡くした主人公の思い出として、葛の葉の話が出てくる。

「しばしば祖母に連れられて文楽座や堀江座の人形芝居へ行つたものだから、そんな時に見た葛の葉の子別れの場が頭に沁み込んでいたせいであろう。あの、母狐が秋の夕ぐれに障子の中で機を織っている、とんから

りとんからりという箴の音。それから寝ている我が子に名残りを惜しみつつ『恋しくば訪ね来てみよ泉なる——』と障子へ記すあの歌。——ああいう場面が母を知らない少年の胸に訴える力は、その境遇の人でなければ恐らく想像も及ぶまい」

そして、その人形芝居『葛の葉』から、こんな想像をめぐらす。

「自分はいつも、もしあの芝居のように自分の母が狐であつてくれたらばと思つて、どんなに安倍の童子を羨んだか知れない。なぜなら母が人間であつたら、もうこの世で会える望みはないけれども、狐が人間に化けたのであるなら、いつか再び母の姿を借りて現れない限りもない。母のない子供があつた芝居を見れば、きつと誰でもそんな感じを抱くであろう」

自分の母が狐であつたらと思つるのは、尋常ではないかもしれない。幼い子供にとって、母という存在はあつて当たり前、ときにはうるさく感じられることさえある。しかし、小さいときから母を亡くし、母親というものへの思い出をもたない人には、母はいつまでも手の届かないあこがれと郷愁の対象であるようだ。そんな思いが、狐という、どこかこの世の絆や法則を抜け出したような存在と結びついたと言えるだろう。狐は変幻自在、時空を超えた感がある。

障子の中でとんからりとんからりと機を織る母狐の姿は、くる日もくる日も黙々と手仕事をつづけた母親一般の姿と重なる。やがて、その姿は遠く消え去り、もう手の届かないところへ行つてしまふが、それでも、「何かことがあつたら、いつでも訪ねてこい」と、無限のやさしさで呼びかけている。

もしかしたら、それは実際の母親ではないかもしれない。幼くして母を亡くした子供のなかには、冷たく打ち捨てられた子供もいるだろう。そのような生き別れであっても、やはり子供は母という存在をあこがれ、求めるのではないか。

「母さえも母を想うことあり彼岸花」という句を読んだことがある。

お母さんにもまた、そのお母さんがいて、そのお母さんを恋しく想う。これは、言われてみれば当たり前のことで、この世に生まれたかぎり、誰でもいつでも、その人には母があり、母を想う心がある。「彼岸花」と言われているので、この句を詠んだ人は、たぶんもう母親を亡くしているのだろう。

亡くなった母と、この世で再会することはできない。もし狐であったら、母に化けて、もう一度この世にまた姿をあらわすかもしれない。安倍の童子をうらやましく思うのは、去って行った童子の母が、信田の森に永遠に生きていて、いつでも帰っておいでと告げているからである。

幼いときに母を亡くさなくても、いつか人は母との別れを経験し、やがて母は遠い存在になって行く。そして、幼くして奉公に出されるような経験がなくても、自分の思うようにはかどらず、途方に暮れるという場面が人生にはある。そんなとき、はるか山のかなたに、母の古里がなつかしく思い出されるのである。

「叱られて 叱られて

口には出さねど 目に涙

二人のお里は あの山を

越えてあなたの 花の村

ほんに花見は いつのこと」

母の母の母の、とずっとたどって行けば、何に行きつくのであろう。生物学的に言えば、人類の祖先、さら

には生命の起源といったものにつかるはずだが、そのような答えでは、自分の母が狐であったらと願う、幼く切実な心は充たされないだろう。もうすでに亡くなった母を、場合によっては冷たく捨てられた母を、いつまでも恋い慕うのは、いま自分が生きていることの根本を、母という永遠と一つに感じ取っているからではないか。

母の母の母の、とたどって行ったその先には、永遠に母なる存在が両手をひろげて待っていてくれる。そんな想いが、キリスト教では聖母マリア、仏教では悲母観音という姿をとったとも言えるであろう。

(二〇〇六年七月三一日受理)